

れば發し盡し、熱弱ければ發し盡さずして内攻するなり、痘皮裏に在りて發起せず、或は發して後痘根紅色變じて白くなり、痘頂黒陷す、是熱弱の發熱緩なるものなり、溫劑を以て發熱を助けて痘毒を發表せしむべし、是等の症は臍帶、或は紫荷車、或は人の爪、或は柳の蟲等を煎じ服さしむべし、或は酒を呑ましむべし、皆妙効あり、是經驗する所なり、近年庸醫一角ウンゴル、俗にウンコウル、用ふる事を好むは誤なり、一角は毒を解するの神藥なり、食毒には奇なり、痘毒には却て惡し、凡解毒の藥性みな寒冷ならざるはなし、一角之性寒冷なり、其寒藥なる一角を服せしむるに因て熱勢醒て彌發起せず、勢脱して終に死に至るなり、烈しく發表すべし右の如くなる症に調合の藥は甚緩し、右に記す處の臍帶已下の物を煎じて多く呑ましむべし、酒をも呑ましむべし、又彼の品々を一つに合せ煎じ用ふるも、藥勢彌強かるべし、酒は痘の良藥なり、食物、性緩なるを忌むべし、既に痘發起し盡さば、右の藥をば止むべし、酒も止むべし、曾て聞く或貧家の小兒痘發したれども、起張せずして死す、貧なれば棺作る事もならず、酒樽を求めて死骸を入れ、夜に入て葬せんと欲す、夕日の頃小兒蘇生して、樽中より母を呼びたりと、是酒氣に蒸れて痘發張したるなり。

〔儀塾集四〕驅蟲散記

昔元和中、大猷公不豫、熱症甚盛、時侍醫以爲傷寒治療之、數日無効、酷熱加深、心神昏悶、胸腹痞塞、水穀不入、喉殆七日、氣息奄々、衆醫無如之何、天下諸侯憂之、台德公大驚之、召和氣驢庵瑞壽令診脈、以其歷世爲良醫也、瑞壽曰、是痘瘡將發、非傷寒也、藥治不適、致有如此、侍醫爭曰、是不必痘瘡、瑞壽曰、我診三部脈候爲痘不疑、諍論不已、公乃命瑞壽上藥速進、家傳驅蟲散一貼、胸悶漸開、又進一貼、食氣始臻啜粥二碗、至三更痘甲悉出、逐日平復、公大賞之、增祿賜相州御馬、本鄉二邑、自是醫名籍甚于天下、遠振清麻呂之舊名、新輝和氣氏之醫門、當時議者曰、嗚呼驢庵造命之大功、猶勝良將開邦之勳業、驢庵余先考之師、故謹錄焉、